



Title	マルチメディア・コーパスと言語行動研究：先行研究との比較を中心に
Author(s)	孫, 栄爽
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2013, 47, p. 39-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54391
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

マルチメディア・コーパスと言語行動研究

— 先行研究との比較を中心に —

孫 栄 爽

キーワード：コーパス言語学／計量言語学／マルチメディア・コーパス／言語行動／
非言語表現

1. はじめに

「マルチメディア・コーパス」とは、話し手の発話（音声）を文字化したテキストとその発話場面の映像とをコンピュータ上で同期させ、文字化テキスト上の文字列（単語など）を検索すると同時に、その発話時の映像・音声をも参照できるようにしたコーパスのことである（石井・孫2013）。それは、言語情報のみを扱う従来の「モノメディア・コーパス」とは異なり、発話場面の映像を参照することによって、話し手と聞き手のコミュニケーション行動をまるごと観察できるという特徴をもっている。筆者は、これまで、テレビ放送を対象とするマルチメディア・コーパスを作成し、主に話し手の表現行動について計量的（コーパス言語学的）な分析を行ってきたが、そうした研究の位置づけについては必ずしも明確にしてこなかった。そこで、小稿では、マルチメディア・コーパスを用いた筆者の研究が、言語行動研究、とくに、言語表現と非言語表現（視線・表情・身振りなど）との関係を解明しようとする諸研究の中で、どのような特徴・意義をもつものであるかを、従来の関連研究と比較しながら整理する。

2. 従来の研究事例

対面的な発話場面において、話し手の発した言語は、それだけが独立して存在するのではなく、非言語表現と共に言語行動を成し、その一部として現れる。非言語表現には、声の調子や大きさなどいわゆるパラ言語も含まれるが、これは従来の音声コーパスでも調べられる。小稿では、映像から得られる情報の中で、主として話し手の視線・表情・身振りについて言及している研究を取りあげる。

先行研究の収集には、国立国語研究所がウェブ上で提供する「日本語研究・日本語教育文献データベース」を利用した。このデータベースには、日本語学および日本語教育に関連する「雑誌論文」と「論文集」の情報が収録されている。検索にはデータベースの「簡易検索」機能を使い、関連性があると判断した表1の各検索語を入力した。

表1：検索語一覧（括弧内はヒット数）

言語行動関連	言語行動 (561)、言語運用 (67)、表現行動 (17)、表現意図 (81)
非言語表現関連	ジェスチャー (67)、身振り (49)、身ぶり (63)、動作 (408)、視線 (51)、表情 (80)、非言語 (275)、パラ言語 (30)、準言語 (2)、副言語 (1)、パラランゲージ (2)
言語関連	話し言葉 (403)、話しことば (864)
合 計	3021件

先行研究には、内省にもとづいて言語・非言語表現の関係を概観するものも多数あったが、ここでは、その関係を調査データなどにもとづき実証的に論じているものを中心に取りあげる。また、当然、言語表現と非言語表現の一方だけではなく、両者の関係に特に焦点を当てていると判断した研究事例について、その手法と研究成果を紹介する。なお、今回は「日本語研究・日本語教育文献データベース」を利用したため、文化人類学・動作学・心理学分野などの研究事例については検討できていない。

2.1 研究事例の紹介

- [1] 山田美樹 (1992)「談話における非言語表現の一側面—首振り動作・視線と談話との関係について—」(『阪大日本語研究』4)

座談場面をあらかじめ設定し、日本人大学生10人と外国人留学生2人（被験者は全員20代の女性）がそれぞれ2人ずつ、10～20分ほど自由談話をした録画データを用いて、主に発話時における首振り動作・視線・発話スピードについて分析している。たとえば、首振り動作は、「前振り」と「後振り」にわけることができ、前振りは15モーラに1回、主として「文節の切れ目」で現れるという。また、前振りの後には高い確率で相手からの反応があることから、首振り動作は、ピッチやイントネーションと共に日本語独特のリズムを生み出しているとする。

- [2] 瀬戸千尋 (2000)「ジェスチャーの使用頻度に関する実証的研究—言語の潜在的影響—」(『異文化コミュニケーション研究』12、神田外語大学異文化コミュニケーション研究所)

日本語と英語それぞれを母語にする8名のバイリンガルに、「今の日本経済を立て直すのに何が最も重要だと思うか」というテーマで15分間日本語と英語で議論させたデータを分析し、日本人のバイリンガルは日本語より英語で話す場合に頻繁にジェスチャーを伴っている、という結果を得ている。

- [3] 松井恵里香 (2004)「若年層における非言語表現の研究—若者の視線行動を中心として—」(『昭和女子大学大学院日本語教育研究紀要』2)

高校生・大学生50名を対象に視線行動に関するアンケート調査を行い、「相手のどこを見て話すか」「話し相手によって視線の位置を変えるか」といった質問に対する回答から、若年層の日本語母語話者は発話時に相手の顔や目を見ることにあまり抵抗感を感じていない、という結果を得ている。

- [4] ザトラウスキー, ボリー (2005)「談話と文体—感情評価の動的な過程について—」(中村明ほか編『表現と文体』、明治書院)

女子大学生二人の座談場面（約20分間）を資料に、感情評価（「汚い」「お

もしよかった」など)をするとき、話し手が相手(受け手)に目を向ける行為(視線)で相手の反応をうかがい、相手の表情などに影響を受けながら、話し手自身の言動を動的に変えている現象を観察して、談話の文体は話し手と相手の参加によって展開していく過程で作り上げられる性質のものであることを論じている。

- [5] 任炫樹(2005)「断り表現と表情の関係―日韓対照の観点から―」(『日本学報』64、韓国日本学会)

テレビドラマ・映画を資料に、日韓の断り表現の発話時における話し手の表情を調べている。たとえば日本語では、相手の依頼を断る発話で無表情を伴うと、その表情は相手の意に添えないことを示す断りのシグナルになったり、断る意図を補助もしくは強調する役割を担当したりするという。

- [6] 中井陽子(2006)「日本語の会話における言語的／非言語的な参加態度の示し方―初対面の母語話者／非母語話者による4者間の会話の分析―」(『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』19)

20・30代の日本語母語話者2人と非母語話者2人が初対面で約45分間行った自由対話の録画データを用い、特に視線・手の動き・身体の姿勢の動きに注目し、発話参加者がどのように会話への参加態度を示し合うかを分析している。発話参加者は、他の参加者の注意を引くために、「あの」と言ったり、他の参加者を見たり、膝を叩いたり、体を前に傾けたりすることで、会話への参加を促しているという。

- [7] 荒川歩(2011)「指さし行動と発話による談話の達成」(『社会言語科学』14-1[特集:相互作用のマルチモーダル分析]、社会言語科学会)

友人同士の大学生22名を特定の距離と角度に座らせ、6分間自由に会話するように教示してその場面を撮影した後、撮影した映像を被験者に見せ、指さし行動を伴った発話についてその理由を尋ねている。話し手の指さし行為には、大きく、言語による指示が省略されているのでそれを補う場合(「最近どうなん?」[主語省略])と、指さしている対象と言語の意味するところが一致しない場合とがあり、話し手はその場にはない事象でも、相手が知って

いるものであれば相手を指さす場合があることなどを指摘している。

他にも多数あったが、以下ではその一部を挙げることに留める。

- [8] ル パープ, ジャンポール (1980)「視線と言語の伝達表現」(『待兼山論叢(日本学)』14、大阪大学)
- [9] 高田由美 (1987)「言語と非言語の関連について 形容語のもつ非言語的表象についての考察 (1) 直線の線型表現を刺激とした場合」(『聖心女子大学論叢』69)
- [10] 池田優子 (1988)「インタビューにおける非言語表現—目の動きの記述—」(『日本語教育論集』5、国立国語研究所日本語教育センター)
- [11] 杉戸清樹 (1989)「ことばのあいづちと身ぶりのあいづち—談話行動における非言語的表現—」(『日本語教育』67、日本語教育学会)
- [12] 西原鈴子 (1995)「(特集: しぐさの言語学) 異文化接触における非言語行動」(『日本語学』14-3、明治書院)
- [13] 斉藤美紀 (2000)「対面会話における頭の動きと視線の機能」(『言語情報科学研究』5、東京大学言語情報科学研究会)
- [14] 任炫樹 (2002)「断りとアイ・コンタクト」(『言葉と文化』03、名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻)
- [15] 森下朝日 (2002)「インタビュー中に見られる表情表出」(『国際文化学』6、神戸大学)
- [16] 黄士瑩 (2003)「日本人と台湾人の非言語伝達の対照研究—謝罪表現について—」(『台湾日本語文学報』18、台湾日本語文学会)
- [17] 古山宣洋 (2005)「発話と身振りの協調に見られる談話における時空的隣接/連続性」(『社会・行動システム 講座社会言語科学』5、ひつじ書房)
- [18] 坊農真弓・片桐恭弘 (2005)「対面コミュニケーションにおける相互行為的視点 ジェスチャー・視線・発話の協調」(『社会言語科学』7-2、社会言語学会)
- [19] 池田瑠璃子・森和彦 (2005)「発話に伴う身振りの補足的コミュニケーション機能—でたらめ語による発声条件を用いて—」(『秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学』60)
- [20] ザトラウスキー, ボリー (2005)「情報処理, 相互作用, 談話構造からみた倒置

と非言語表現との関係」(『活動としての文と発話シリーズ 文と発話1』、ひつじ書房)

- [21] 佐々木美加 (2006)「会話中の不一致メッセージが受信者の帰属、感情、行動に与える影響」(『社会言語科学』9-1 [特集：実験による言語行動の研究]、社会言語科学会)
- [22] ザトラウスキー、ポリー (2008)「講義談話における姿勢、無意味な動作、身ぶりについて」(『表現研究』88、表現学会)
- [23] キャンベル、ニック (2010)「日常会話における気持ちの伝え方」(林博司・定延利之編『コミュニケーション、どうする？どうなる？』、ひつじ書房)
- [24] 内藤伊都子 (2011)「親密さの要因としての対人魅力、自己開示および非言語表現—同性2者間による日本人の友人と異文化の友人の比較—」(『ヒューマン・コミュニケーション研究』39、日本コミュニケーション学会)
- [25] 片岡邦好 (2011)「主観性とマルチモダリティー直示表現とジェスチャーによる仮想空間の談話的共有について—」(『社会言語科学』14-1 [特集：相互作用のマルチモーダル分析]、社会言語科学会)
- [26] 前田奈穂・横山ひとみ・藤原健・大坊郁夫 (2011)「会話行動が関係開始スキル評価に与える影響—発話内容とハンド・ジェスチャーを用いたマルチ・チャネル・アプローチによる検討—」(『社会言語科学』14-1、社会言語科学会)
- [27] 榎本美香・伝康晴 (2011)「話し手の視線の向け先は次話者になるか」(『社会言語科学』14-1、社会言語科学会)
- [28] 古山宣洋・末崎裕康・関根和生 (2011)「身振りにおけるマイクロスリップと視点の持続性」(『社会言語科学』14-1、社会言語科学会)
- [29] 長岡千賀ほか (2011)「心理臨床初回面接の進行—非言語表現と発話の臨床的意味の分析を通した予備的研究—」(『社会言語科学』14-1、社会言語科学会)
- [30] 定延利之 (2012)「ジェスチャーとしての感動詞と終助詞」(『日本語学』31-3 [特集：ジェスチャーとことば]、明治書院)

2.2 従来の研究事例の共通点

上述の先行研究は、調査項目も分析観点も異なるが、以下の点において共通している。

1) 特定の言語表現・言語項目に注目した研究が少ない

従来の研究の多くは、たとえば、発話参加や話者交代などある行為の達成のために、視線がどのような役割を果たすかなど、非言語表現の機能に注目して、言語・非言語表現の関係を論じている。発話参加者間の相互行為に言語・身振り・視線など（の各モード）がどのように動的に関わり合っているかを究明しようとする「マルチモーダル分析」もここに分類できる。反対に、[4]（ザトラウスキー 2005）や [5]（任 2005）のように、特定の言語表現（感情評価表現、断り表現）の発話時に、どのような非言語表現（視線、表情など）が現れているかを分析するものは非常に少ない。

2) 計量的研究が少ない

アンケートによる意識調査やテレビドラマ・映画などをデータとした調査もみられるが、多くは、人工的な場面・話題などを設定してそこで観察される言語行動を記録する実験観察的な手法を用いた調査である。実験観察的調査は、データ収集の段階でかなりの時間と労力を要するので、多数で多様な被験者を対象に大量の発話データを収集することが難しい。このような事情もあって、従来、計量的な調査分析はあまり見られず、あったとしても言語・非言語表現の関係について論じるにはデータ量が十分でない場合が多い。

3) 言語・非言語表現以外の関連要素を考慮した研究が少ない

言語行動は相手が誰かなどによって変わる。言語表現と非言語表現からなる言語行動はそれぞれが独立して存在するわけではないので、相手との関係や状況など、言語行動をとりまくさまざまな要素に影響を受けながら現れる。言語行動の様相をより正確に捉えるためには、これらの関連要素を積極的に考慮する必要があるが、このような試みはあまり見られない。¹⁾

3. マルチメディア・コーパスと言語行動研究

3.1 「テレビのマルチメディア・コーパス」

マルチメディア・コーパスは、発話とともに発話場面が観察できるものならば、資料となりうるものに制限はない。だが、言語行動が広範に、また容易に観察できる資料にもとづくほうが、本稿で設定しているような研究目的には適すると考える。そういった面で、テレビ放送（以下、テレビ）は、現時点でもっとも有用な資料となりうる。テレビは、我々の身近に存在するメディアで、テレビの音声からは出演者たちの言語行動のうち言語表現による情報が²⁾、映像からは発話時における出演者たちの視線・表情・身振りなど非言語表現による情報が、比較的容易に得られる（言語資料としてテレビの問題点については、石井・孫（2013）を参照）。こうした利点から、筆者はこれまで、テレビをデータとするマルチメディア・コーパス（「テレビのマルチメディア・コーパス」）を作成・利用してきた。表2には、「テレビのマルチメディア・コーパス」のうち、筆者が作成した「対談番組コーパス」の概要をまとめる。

表2：「対談番組コーパス」の概要

収録期間	2009年3月31日～2009年8月9日の約4ヵ月間
収録番組	大阪の6放送局7チャンネルで放送された対談番組の一部（106番組）
番組放送時間	63時間
文字化テキスト	66241文（相当）、時間数：39時間41分
言語情報	見出し語（読み・代表形）、語種、品詞
非言語情報	視線・身振り・動作・表情（ただし一部番組のみ）
発話参加者情報	性別、年齢、職業、（番組内での）役割、出身地
番組情報	ジャンル、チャンネル、曜日、時間帯、長さ

3.2 マルチメディア・コーパスを用いた言語行動研究の事例

ここでは、筆者が「テレビのマルチメディア・コーパス」を利用して行った言語行動研究の事例を二つ紹介する。

[31] 孫栄爽(2010)「擬音語・擬態語と身振り―テレビ放送のマルチメディア・コーパスによる計量的分析―」(『計量国語学』27-4)

擬音語・擬態語の発話時にはほぼ確実に身振り（映像的身振り iconic gesture）が伴われる傾向があるという指摘（Kita1997）に対し、擬音語・擬態語の個別例に注目して、実際に身振りが現れる確率を調べたものである。分析に用いた擬音語・擬態語は延べ約1700語、異なり約600語で、調査の結果、擬音語・擬態語には身振りが現れやすい語とそうでない語があるということ、身振り共起率は擬音語・擬態語の描写力（オノマトペ度）と正の相関関係にあるということが、パターン化された傾向として見出せた。

表3：擬音語・擬態語の発話時における、身振りの種類と共起の有無

グループ (擬音語・擬態語 の分類)		身振り（有）				身振り （無）	映像的 身振り 共起率
		映像的 身振り	暗喩的 身振り	直示的 身振り	その他		
A	A	51	0	1	2	10	83.6%
B	B1	3	0	0	2	0	－
	B2	32	0	2	3	21	60.4%
	B3	86	76	1	20	31	73.5%
C	C1	4	0	0	2	17	19.0%
	C2	8	32	0	14	92	8.0%
	C3	57	94	24	34	179	24.2%
D	D	32	104	28	23	643	4.7%
計		273	306	56	100	993	21.6%

すなわち、表3の、グループAとは、①音を表すこと、②臨時的または強調的な形をとること、③文の中で副詞として働く際に「と」を義務的に伴うことを全部みたす、すなわち、描写力の高い語の集まりである。そして、グループBはいずれかの2つを、グループCは1つをみたしており、グループDはまったくみたさない語である。身振りがもっとも頻繁に観察されたのは、Aグループの擬音語・擬態語（「ドッカーン」「ジャジャジャジャー」など）であった。

[32] 孫栄爽 (2011)「マルチメディア・コーパスを用いた確認要求用法の研究—「ネ」「デショウ」と視線行動との関係を例に—」(『日本言語文化』18、韓国日本言語文化学会)

終助詞「ネ」と「デショウ」の発話時における話し手の視線を調べている。たとえば「ネ」には、さまざまな用法があるが、中でも、相手に同意や確認などを求めるような働きが感じられる場合（〈確認要求〉）と、そのような働きが感じられない場合（〈自己確認〉）とを対象とした。

- a: 君はそのとき、たしか、中学生だったね。 b: はい。〈確認要求〉
a: 何か不便な点は？ b: 学校が家から遠いことですね。〈自己確認〉

「ネ」の用例を約1000例集め、視線を考慮せず音声のみでいずれかに分類可能だった約600例を対象に、映像から発話時における視線のありかを調べた結果、表4のように、〈自己確認〉では話し手の視線が相手に向けられる

表4:「ネ」の用法と視線

視線の分類 \ 「ネ」の用法	〈自己確認〉	〈確認要求〉
相手に向けられている場合	254 (66.3%)	217 (99.1%)
相手以外のものに向けられている場合	129 (33.7%)	2 (0.9%)
計	383	219

場合もそうでない場合もあるのに対し、〈確認要求〉は、〈発話現場に実在する事物に言及する発話を除いて〉ほぼ確実に相手に向けられるということが確認できた。³⁾

3.3 マルチメディア・コーパスにもとづいた言語行動研究の特色

2で紹介した従来の研究事例と比較し、「テレビのマルチメディア・コーパス」を用いた研究事例は、以下の点において特色がある。

1) 言語の側面を重視している

[31] (孫2010) と [32] (孫2011) は、「擬音語・擬態語」「終助詞ネ」という特定の言語項目に注目し、その発話時における非言語表現との関係を論じている。他にも、「テレビのマルチメディア・コーパス」を用いた研究には石井 (2009) などがあるが、そこでは、見出し語「思う」のKWIC (Key Word In Context) を作成し (図1)、調査対象を限定した上で、一人称主語の思考態度を表明する「(～) 思う」の発話時における視線行動を調査し

図1: 「思う」のKWIC (部分) [石井2009より]

行番号	CH	見出し語	前文脈	キー	後文脈
244	2	思う	デュー コモ 田ク アリマスカラー シノ コモ オホエテオイトホシート	おもいマス。	ワ キョーウ フクシスーノ ウリシ
18	1	思う	ニ キョーイクオ ヨク スルニワ ソーユー フタシオ カルタ シテホシート	おもいマス。	ニ ワンニ 田 ソレワ セーフ
151	3	思う	シマ。 田 ウン。 田 ナソーユーコーナ ジキョーガ アツタ イーナ	おもいマス。	田 シマ。 田 ナソー。 田 ーエ
156	1	思う	ヒ ヨーゴクンイタシノ パーイオ レーニ トッダ エ オツタエシヨ	おもいマス。	マ オトシヨリヲダスネー ネナ
184	1	思う	ニ オデルニ イル オーサキトリハインニ イマノ ヨースオ キーアミヨ	おもいマス。	エー オーサキサン。 田 ハイ。 8
220	3	思う	田 マー ジンバ カンシノ フタオホナ 田 ハイ。 田 ナマツミヨ	おもいマス。	田 ハイ。 ジキ ヲツタ アホ
220	2	思う	ホンダ オソラウネー 田 エー。 田 ナコレバ ナーモーリホダロ	おもいマス。	田 ハイ。 田 コンナ ウエノ 田
22	3	思う	イト カンガエアイタユー ヨトオ オー オワカリニナッタイタケルダロ	おもいマス。	デ ヨノ アヒバシ シー ワライニ
22	3	思う	イタイル カルタサ ソーユー オソラウ ドーサオ マタ エンジンダロ	おもいマス。	フシタ ヨノ ウタオ カリカシ カ
100	3	思う	ダスネ ヨノ サンバシヨノ アンターニシヤ エ ベンキョーシヤキタイ	おもいマス。	ジレワワ キョーウ ミナラン コノ
203	3	思う	デ ア キョーキョーシューノ インションオ クローズアップシヤキタイ	おもいマス。	エー スシヨニ オイダイシヤキタイ
369	1	思う	オリロー オモイマスカド 1ニカガ ムーホンダ アノー ヲツタイキタイ	おもいマス。	ドーモ。 <顔紅い> 田 ドーモ アノ
810	1	思う	ウー ヨーカノ ケーカウ コトリオ ヲツサスネ オツカタイシヤキタイ	おもいマス。	田 ハイ。 田 カルラン ウンギン
78	1	思う	シメツ アノ ヨツカダ ミナランカニ サイバクニシヨ シヤイタシヤキタイ	おもいマス。	田 ヨノ バライニ キンセンダ
110	1	思う	シメツアノ ドーカ アリマス 田 シンキョーオ オコナツタイシヤキタイ	おもいマス。	田 レンキョーデー オツグデ
202	1	思う	エニ キョーウーキョーネンマエニ ニッポンニ サバノツキタシヤキタイ	おもいマス。	リボーターノ ハナナカワランサ
208	3	思う	ーノイタシヤシタ ア バンダニ ナカカ イマダ ヨシヨーカイシヤキタイ	おもいマス。	田 ハイ。 <顔紅い> 田 デ ヨ
367	1	思う	。 センザイナドモ キオシケル コカガ アツタ 田 オホガイシヤキタイ	おもいマス。	エー コーユー コシシモンデゴザイ
2	3	思う	ダスニニ ナルンチンカ。 ヨノ コトオ スコン トリガエタシヤキタイ	おもいマス。	エ コレガ ウランニ ニョクワラン
107	3	思う	ヨクキョーヨコーズ カンバツアル ヒトノタノタノタノ トリアダシヤキタイ	おもいマス。	田 ハイ。 田 キョーニ スタダニ
34	3	思う	ー コデ セーシヤト ヨバレル シキニワテ ベンキョーオ シヤキタイ	おもいマス。	セーシヤット ドンナ シキオ ソー
277	1	思う	田 ーア。 田 ーア。 田 ナアルンダ ショーカイシヤキタイ	おもいマス。	田 <鼻縮> 田 コノ タノク
250	3	思う	イッショニ イカレタ フタニ カニニ オハナシウ カガリタシヤキタイ	おもいマス。	田 <鼻縮> 田 <鼻縮> 田
168	1	思う	ワ カチオ マモル シュノ カタニ オハナシ ウカガッテシヤキタイ	おもいマス。	田 アノー マイニチノ セーカニ
160	1	思う	バシラン ナーナイカイノ カガタノ イケンオ マズ ウカガッテシヤキタイ	おもいマス。	コバシサン。 田 ハイ。 エ ソレ
230	3	思う	タレドモ コノ ウタオ ミナラン イッショニ コレカダ ウタッテシヤキタイ	おもいマス。	エ ソレデワ マ ▲ マズ サイシ
230	3	思う	タレドモ コノ ウタオ ミナラン イッショニ コレカダ ウタッテシヤキタイ	おもいマス。	エ ソレデワ マ ▲ マズ サイシ
167	3	思う	ー イッポンシヤニ ヲツリ ジヤノ ナチー カナオ ヲツテシヤキタイ	おもいマス。	田 イキニ ヲツリ イコト オ
230	3	思う	ワレナル ウタダスニ。 エ カンダニニ ナー カシタ ミナシヤキタイ	おもいマス。	ワシナルウーバーカムトニ オ
230	3	思う	田 田 ハイ ソレデワ イッポンニ マンナツゴナーニ タリタ	おもいマス。	エー キョーウ マター ウタオ ヒト

ている。

「擬音語・擬態語」や思考動詞「思う」のように特定の自立語を対象とした言語行動研究の事例は従来殆どなく、これらの研究が言語・非言語表現の関係を考える上で言語の側面を重視していることは特徴的である。

2) 非言語表現の機能を帰納的に考察している

[31] (孫2010) では、①②③をより多くみたす語の発話時ほど身振りが頻繁に伴われることを指摘しているが、田守・スコウラップ (1999) によれば、これらの語は描写力 (オノマトペ度) の高い語である。言語表現の伝える描写力が高ければ、身振りの表す視覚的情報をあえて加える必要がないとも考えられるが、調査結果はその反対である。[31] は、この点に注目し、描写力の高い語の特徴から、帰納的に身振りの機能を考察している。このことは、「終助詞ネと視線行動の関係」の場合も同様であり、[32] (孫2011) では、「ネ」の用法によって話し手の視線行動が異なることから、話し手の発話態度と視線行動の機能との関係を分析している。

3) 計量的観点から傾向を見出している

言語行動の全貌を明らかにするためには、言語・非言語表現の関係について有意味な傾向を見出していかなければならない。そのためには、多くの実例を観察して、見出した傾向が、パターン化されたものであるか (個人差などによる) 偶発的なものであるか、またパターン化されたものの中でも中心的なものであるか周辺的なものであるかを峻別することが重要になる。(まだ代表性があるほどの規模とはいえないが) [31] が約500人の話者が発した延べ約1700語の擬音語・擬態語を、[32] が約100人の話者が発した延べ約1000語の終助詞「ネ」を対象に、計量的観点から言語・非言語表現の関係を調べているのは、事実裏付けられた有意味な傾向を見出すためである。

4. 今後の課題

以上、従来の研究と比較して、筆者のマルチメディア・コーパスを用いた言語行動研究の特徴について述べてきた。小稿で取りあげた「テレビのマルチメディア・コーパス」は、想定されるマルチメディア・コーパスの一例にすぎず、紹介した事例もまた、同コーパスを用いた言語行動研究の一例にすぎない。ただし、筆者の目指す言語行動研究が、言語の側面を重視しており、計量的観点から言語表現と非言語表現間の有意味な傾向を見出そうとする、従来あまり例のないものであるということは主張できたと考える。

以下では、今後、マルチメディア・コーパスを用いることでどのような言語行動研究が可能となり、またどのような分析観点が必要となるかについてまとめたい。

1) 調査単位

従来は非言語表現の機能に注目した分析が多かったため、非言語表現の単位を設定する必要はあっても、発話時における言語表現を特定の単位に限定する必然性はなかった。そのため、重要な論点であるにもかかわらず、たとえば、単語など特定の言語単位で、言語表現と非言語表現の関係を調べることが有意義であるか否かについては、実は十分な議論がなされていない。

従って、今後は、文や句、単語など多様な言語単位からも言語・非言語表現のありかたを調べ、その有効性について考える必要がある。「テレビのマルチメディア・コーパス」を用いれば、この点に関する考察が可能であり、また同コーパスには見出し語・品詞・語種情報が搭載してあるので、これまでになかった副詞・外来語など特定の言語グループに注目した分析も可能である。

2) 言語行動の関連要素

現実の言語行動は、それをとりまくさまざまな要素に影響を受けながら現れる。たとえば、南（1987）が「談話の要素」としてあげている、参加者・

話題・コミュニケーションの機能・表現態度・媒体・状況・ネットワーク・文脈などや、Hymes (1974)、ネウストプニー (1979)、杉戸 (1999) などが提案する要素も、その候補になりうる。

「テレビのマルチメディア・コーパス」では、さまざまな発話参加者がさまざまな状況でさまざまな話題について発話しているので、南 (1987) の「談話の要素」などを考慮に入れた形での研究も可能である。従って、今後は、まず言語行動に関連する要素にはどのようなものがあるかを考え、そのうちどの情報がコーパスに付与でき、また分析観点として用いられるかについて考察しなければならない。

3) 調査項目の探索

言語・非言語表現の関係は、上述したように、さまざまな関連要素に影響を受けながら現れるため、予測しにくい場合が多い。特に複雑で精密な調査項目になると、予測できないことのほうが多い。たとえば、[3] (松井 2004) は、「話し相手によって視線の位置を変えるか」などをアンケート調査しているが、もし視線を変えたとしたら、相手が先生か友だちかで異なるのか、相手が一人か複数かで違いはないのか、視線以外に身振りは変えないのかなど複雑な問いになると、現実の言語行動を反映した明確な答えが得られる可能性は必ずしも高くない。

だが、複雑で精密な調査項目でも、「聞き手 (相手) 情報」「状況情報」「非言語情報」が「マルチメディア・コーパス」に搭載してあれば、これらの要素の組み合わせを変えながら各発話場면을観察することも、そのときの言語行動を分析することもできる。したがって、今後は、言語行動の様相に関わる重要な手がかりを得るために、さまざまな関連要素の中から、優先して分析すべき調査項目を探索的に選ぶ必要がある。

4) 調査資料の特徴

テレビで行われる言語行動は、自然談話でのものとは必ずしも同じではな

い。その要因の一つとして、視聴者の存在があると考えられる。テレビでは対談番組のように、出演者同士の会話でも、すべての発話は最終的には視聴者に向けられたものであるため、話し手は（番組の種類や出演者の職業・役割などによる程度の差はあるものの）発話現場にいない視聴者の存在を意識しながら話すことになるが、自然談話ではこの種の発話は一般的ではない。したがって、「テレビのマルチメディア・コーパス」の調査結果は、まずはテレビの言語行動として解釈する必要がある。しかし、テレビにおいて自然談話と全く違った形で言語行動が行われているとも考えにくいことから、その共通点と相違点に関する考察も必要である。

5) 多様なマルチメディア・コーパスの開発

「テレビのマルチメディア・コーパス」は、基本的にはテレビの映像しか使わないきわめて簡素なものであり、パソコンに関する基礎知識さえあれば、個人でも作ることができる。マルチメディア・コーパスにもとづく言語行動研究が、今後さらに発展するためには、それをういたさまざまな調査・分析と共に、小規模であっても多様なコーパスの開発が欠かせない。

[付記]

小稿は、2013年度「日韓文化交流基金招聘フェローシップ」の助成を受け、派遣先の大阪大学で行った「日・韓表現行動に関する先行研究の統計的検証」の成果の一部である。

[注]

- 1) たとえば、[3] (山田1992) は被験者の年代と性別を制御している点で、話者属性を考慮しているともいえるが、異なる年代・性別との比較などは想定されておらず、積極的に話者属性を考慮しているとはいいがたい。
- 2) テロップなど、画面に表示される言語情報については、現段階では、考慮の外に置く。
- 3) 表の数値は、孫 (2009) 以降、再調査したものである。孫 (2009) とは用法名も数値も多少異なっているが、視線の分布に大きな変動はない。

[引用文献]

- 石井正彦 (2009) 「テレビ放送のマルチメディア・コーパス—映像・音声を利用した計量的言語使用研究の可能性—」『阪大日本語研究』21
- 石井正彦・孫栄爽 (2013) 『マルチメディア・コーパス言語学—テレビ放送の計量的表現行動研究—』大阪大学出版会
- 杉戸清樹 (1999) 「表現行動の基盤」中村明ほか編『日本語表現』明治書院
- 孫栄爽 (2009) 「終助詞ネの用法と視線行動—テレビ放送のマルチメディア・コーパスによる計量的分析—」『日本語学会2009年度春季大会予稿集』
- 田守育啓・ローレンス＝スコウラップ (1999) 『オノマトペ—形態と意味—日英語対照研究シリーズ6』くろしお出版
- ネウストプニー, J. V. (1979) 「言語行動のモデル」南不二男編『言語と行動』大修館書店
- 南不二男 (1987) 「談話行動論」『国立国語研究所報告92—談話行動の諸相—座談資料の分析—』(三省堂) 所収
- Hymes, D. (1974) *Foundations in Sociolinguistics: An ethnographic approach*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. (唐須教光訳『ことばの民族誌—社会言語学の基礎—』紀伊国屋書店、1979)
- Kita, S. (1997) Two-dimensional semantic analysis of Japanese mimetics. *Linguistics* 35.

(文学研究科外国人招へい研究員)

SUMMARY

Study of Expressive Behavior Using a Multimedia Corpus and Comparison with Previous Studies

Youngsuk SON

This study describes the methodology and characteristics of a study using a multimedia television corpus to clarify the relationship between verbal and nonverbal expression (gesture, facial expression and gaze), and compares them to those used in previous studies.

The multimedia television corpus uses data from television talk shows, not only utterances but also video/audio of the utterance situation. This approach has distinct differences from those of previous studies, in the following respects: the present study (1) places emphasis on verbal expression; (2) considers the function of nonverbal expression inductively; and (3) tries to determine the relationship between verbal and nonverbal expression from a quantitative perspective, based on a large number of examples.

To further develop this research into expressive behavior using the multimedia corpus, it will be necessary to develop various multimedia corpora, even small-scale ones, in the future, with attention to the following factors: (1) research units such as phrases and clauses, (2) factors such as utterance, participant, and situation in their relation to expressive behavior, and (3) the characteristics of the television corpus data.